

英語のdoの多義性に関する認知文法的分析

A Cognitive Grammatical Analysis of the Polysemy of *Do*

松 井 真 人

Mahito Matsui

要旨

本稿は、認知文法の理論的枠組みで、英語のdoの多義性を明らかにした。まずLangacker (2002, 2005)が指摘するように、本動詞用法のdoは、executeあるいはcarry outといった非常にスキーマ的な意味であり、doとその目的語の概念が合成されることにより、前者が後者によって精緻化されている。ただしdoの目的語が行為の対象を表す場合には、目的語の概念内容の中で、その対象に対して行われる特定の行為に関する知識が活性化され、その知識によってdoの概念内容が精緻化される。自動詞用法の場合は目的語が無いので、ランドマークとなる行為が背景化されていると分析できる。助動詞用法のdoは、本動詞用法の場合よりさらに意味が希薄化している。助動詞用法のうち、代動詞doの概念内容はそれが前方照応的に指示する動詞によって精緻化されるが、doが疑問、否定、付加疑問、強調を表す場合は、doとその補部の動詞が生ずる構文スキーマによって、表現にそれらの意味が加えられると解釈できる。

キーワード：do、多義性、認知、百科事典的知識、構文スキーマ

1. はじめに

本稿は、英語の本動詞および助動詞doの意味を認知文法の理論的枠組みで分析することによってその多義性を明らかにすることを目的とする。先行研究としてのLangacker (2002: 135)では、意味の希薄化(attenuation)の観点からdoの多義性が説明されており、瀬戸ほか(編)(2007)では、シネクドキを意味拡張の基盤とするdoの多義ネットワークが示されている。次章以降で詳しく述べるように、これらの分析は非常に示唆に富むものであるが、それぞれ問題点もある。そこで本稿は、これらの先行研究の内容を検討し、支持できる点と問題点を指摘した上で、認知文法の理論的枠組みを用いてdoの多義性についてのより詳細で妥当な分析を提示する。

2. 先行研究の検討

2. 1 Langacker (2002, 2005)の分析

まず、Langacker (2002, 2005)におけるdoの分析について検討する。Langackerはdoの意味を大きく3つに分けている。それぞれの意味は(1a-c)のdoの意味に対応する。

- (1) a. I did something terrible.
- b. Those clothes just won't do.
- c. What does she want?

(Langacker 2002: 135)

(1a)は最も標準的なdoの用法である。このdoにはいくつかの下位変種(subvariant)があるが、典型的には、目的語として客体化され解釈されている行為、すなわちこの例文の場合では something terrible に対する「意志的な制御(volitional control)の行使」を表している。このdoは executeあるいはcarry outとほぼ同義である(Langacker 2002: 135)。このような本動詞用法のdoの場合、(2)が示すように、概念の具体化を経て事態の中から派生された抽象的なモノ(thing)がランドマークとなり、能動文の場合はそれが目的語となる(Langacker 2005: 178)¹⁾。

(2) He did {a study/a dance/something/it}.

(Langacker 2005: 178)

そして本動詞のdoは、そのトラジェクターに対して「使役」「責任」という性質を付与する。(3)がすべて不適格な文であるのは、(3a-c)におけるdoのトラジェクターが、そのランドマークに対する「使役」「責任」という性質を持ちえないからである。

(3) a. *The water did some evaporation.

b. *What Sam did was be born.

c. *The vegetables finished cooking before the quiche did it.

(Langacker 2005: 178)

(1b)のdoは(1a)よりも意味が抽象化、希薄化しており、sufficeあるいはbe suitableとほぼ同じ意味である。ここで希薄化(漂白化ともいう)とは「名詞や動詞などの内容語が、助詞や前置詞などのような文法的機能を果たす要素へと変化していく文法化の過程のうち、本来の具体的な語彙の意味が失われて助動詞や設置詞が担うような一般化した文法的な意味へと抽象化していく意味変化」(辻(編) 2013: 61)のことである。(1b)の段階では、希薄化が見られるもののまだ完全に文法化して機能語になっているわけではない。(1c)は助動詞用法のdoであり、その意味はさらに希薄化が進んでいる。「物理的な活動」や「意志的な制御」という意味は薄れてしまい、「プロセス」を表すという最大限にスキーマ的な意味だけが残っている²⁾。そして、プロセスの性質や、そのプロセスが完了的か非完了的かということも特定化されていない。

以上がLangackerの分析の概略であるが、(1a, b)から(1c)への意味拡張、つまり本動詞から助動詞への意味拡張が、希薄化(漂白化)というプロセスで関連付けられているという分析自体は妥当である。しかしながら(1a)と(1b)を比較すると、(1b)には(1a)には無い語彙の意味(sufficeあるいはbe suitable)も加わっているので、この拡張は意味の希薄化だけでは説明できない。またLangackerも認めているように、(1a)のdoにはいくつかの下位変種があり、それらの下位変種間の意味的関連性についても説明する必要がある。さらに、助動詞用法のdoには、(1c)のような疑問を表す用法の他に、(4a)のような否定を表す用法、(4b)のような代動詞の用法、(4c)のような強調を表す用法もある。

¹⁾ 認知文法では、名詞はモノ(thing)をプロファイルすると定義される。モノとはグループ化と具象化によって生じるあらゆる産出物のことである(Langacker 2008: 105-106)。また、表現によって喚起される概念内容のうち、最も際立ちが高く、実際に表現が指している内容をプロファイル(profile)というが、そのプロファイルが複数の参加者の間の関係を表している場合、最も際立ちの高い参加者をトラジェクター(trajector)、2番目に際立ちの高い参加者をランドマーク(landmark)と呼ぶ(ibid. 70-73)。

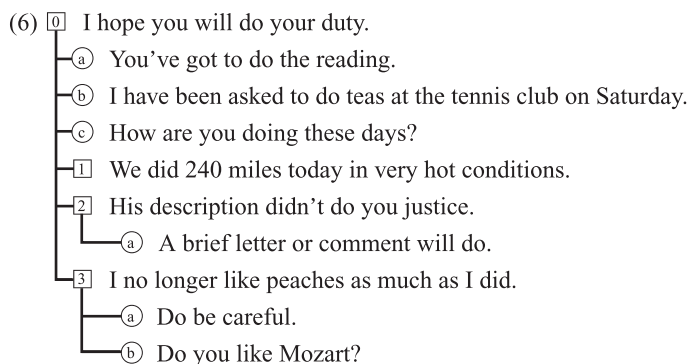
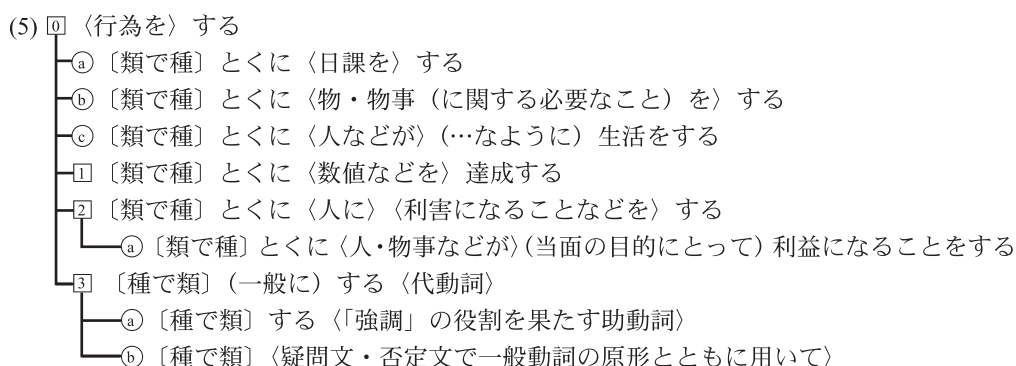
²⁾ 認知文法では、動詞は時間軸上に展開するプロセスをプロファイルする表現であると定義される(Langacker 2008: 99-100)。

- (4) a. I don't like fish.
 b. He plays better than he did a years ago.
 c. He does look tired. (OALD)

本動詞用法に加えて、これらの助動詞用法の意味の間の関連性も説明する必要がある。

2. 2 瀬戸ほか（編）(2007)の分析

瀬戸ほか（編）(2007: 278-280)はdoの多義ネットワークをシネクドキに基づいて記述している。このネットワークを図示すると(5)のようになる。さらに(6)に、それぞれの意味の例文を一つずつ挙げておく。



瀬戸ほか（編）(2007)の分析では、本動詞用法に関しては、0の「〈行為を〉する」が中心義であり、ここから意味が展開する。0-a「〈日課を〉する」、0-b「〈物を〉する」、0-c「生活をする」は中心義から直接展開する副意義であり、中心義が類、これら3つの副意義が種という関係にあるので、シネクドキに基づく意味拡張である。1「〈数値などを〉達成する」と2「〈利害になることなどを〉する」は中心義から直接展開する主要な副意義であり、この場合も、中心義が類、副意義が種という関係にあるのでシネクドキに基づく意味拡張である。2-a「（当面の目的にとって）利益になることをする」は2から直接展開する副意義である。この場合は、2を類、2-aを種とするシネクドキに基づく意味展開である。

次に助動詞用法は、0の本動詞用法の中心義から3の代動詞用法としての主要な副意義へと意味が展開する。これは種で類を表すシネクドキとして分析される。なぜならば代動詞のdo

は行為動詞だけでなくbe動詞以外の状態動詞の代わりもするので、中心義よりも一般的な意味を持っていると考えられるからである。さらに3から3-a「強調用法」および3-b「疑問・否定用法」という副意義への展開は、種で類を表すシネクドキとして分析されている。ここで3が種、副意義が類と分析されているのは、副意義は意味が希薄化して機能語化しているからである。3-aの場合は、希薄化の結果、動詞的特性だけが残り、この動詞的特性をbe動詞も含む本動詞に付加することによって、「強調」の役割を果たしている。いずれの場合でも、助動詞用法では本動詞doの語彙的意味が薄れているので、より一般的な意味への拡張だと分析されている。

以上が瀬戸ほか（編）（2007）によるdoの多義性の分析であるが、そこではLangacker（2002）と同様に、doの本動詞用法から助動詞用法への拡張が語彙的意味の希薄化として分析されている。この意味拡張は機能語化の過程と言えるので、この分析は妥当である。また瀬戸（編）ほか（2007）が、この意味拡張をシネクドキすなわち種から類への意味拡張として分析していることも妥当である。なぜならば、語彙的意味の希薄化は意味の一般化と見なすことができるからである。

その一方で両者は、本動詞の意味拡張に関する解釈が異なる。Langacker（2002）は(1a)に見られるようなexecuteあるいはcarry outを意味するdoを意味拡張の出発点としており、これは瀬戸ほか（編）（2007）が「〈行為を〉する」を中心義と見なしているのと同じである。しかし、Langacker（2002）はそこから(1b)に見られるsufficeあるいはbe suitableの意味への拡張は、中心義に見られる語彙的意味の希薄化であるとしている。確かに(1b)では「目的語の行為に対する意志的な制御」という意味も失われている。そうするとこれは特殊な意味から一般的な意味への拡張なので、種で類を表すシネクドキとなる。一方、(1b)のdoの意味は瀬戸ほか（編）（2007）では2-aに相当するが、瀬戸ほかはこの意味への拡張を、類で種を表すシネクドキと分析している。なぜならば2-aは単に「する」ではなく、「〈利益になることなどを〉する」であるため、意味が特殊化していると解釈できるからである。しかし0と2-aを比較すると、確かに2-aには0にない意味が加わっているが、その一方で、0にも2-aにはない「行為に対する意志的な制御の行使」という意味が含まれている。したがって、0と2-aは単純に一方が類（一般）、他方が種（特殊）という関係にはならない。

本章ではLangacker（2002）と瀬戸ほか（編）（2007）によるdoの多義性の分析の概略を述べ、その妥当な点と問題点を指摘した。次章では、これら2つの分析を踏まえ、より詳細で妥当なdoの多義性に関する認知文法的な分析を提案する。

3. doの多義性分析

3. 1 本動詞用法

3. 1. 1 他動詞用法

本章では、本動詞用法のdoの多義性を認知文法的な視点から考察する。doの本動詞用法には、他動詞用法と自動詞用法がある。まずは他動詞用法について考えていく。

他動詞用法にはそれが取る目的語の種類に応じて、大きく分けて3種類あると考えられる。まず一つ目は、(7)に見られるように、行われる行為が何かがわからない場合、あるいは明確に表現されていない場合に用いられるdoである。

(7) a. What are you doing this evening?

b. The company ought to do something about the poor service.

(OALD)

Langacker (2002, 2005)が指摘するように、この場合のdoはexecuteあるいはcarry outに近いかなり抽象的な意味であるが、「主語として表現される行為者の行為に対する意志的な制御の行使」といった意味が含まれている。また、doは完了的な意味を持つと言える。Langackerは動詞が表わすプロセスを完了的(perfective)と未完了的(imperfective)の2種類に分けている(Langacker 2008: 147-148)。前者は始まりと終わりが意識され、内部が非均質的で時間的な変化を含むプロセスであり、後者は始まりと終わりが意識されず、内部が均質的で安定した状態が続いているプロセスである。完了動詞は、それが表わすプロセスが発話時に出現する場合には進行形を取る。(7a)のdoの進行形はまさにそれに当たる。したがって抽象的な意味を持つdoは完了というアスペクトをその主要な意味として含んでいると言える。

二つ目は、ある種の行為内容を表す名詞類を目的語として取る場合である。そのような名詞類の一つは動名詞である。(8a)が示すように、doの目的語が動名詞である場合、この動名詞は必ず行為を表す動詞から派生したものであり、(8b)のように状態を表す動詞から派生した動名詞であってはならない(Declerck 1991: 52)。

(8) a. Bill does more worrying / travelling / complaining now than before.

b. *Bill does more knowing / weighing / owning now than before. (Declerck 1991: 52)

(8a)の動名詞が表しているのは、その動名詞の派生元の動詞が表すプロセスを概念的に具象化することによって得られる抽象的なモノである(Langacker 2008: 119, fn.25)。

この他に(9)のように行為内容を表す名詞がdoの目的語となる場合がある。この場合の名詞は、動詞から派生したものが多い。

(9) She did a somersault / an imitation of her teacher. (Huddleston and Pullum 2002: 296)

Jespersen (1949: 117)はこの種のdoを軽動詞(light verb)と呼んでいる。軽動詞は、人称や時制という文法的な情報を表すだけで、述部の意味に対する貢献が、その直後に来る名詞（多くの場合は動詞派生名詞）に比べてはるかに小さい動詞である(Huddleston and Pullum 2002: 290)。doの他にgive、make、have、takeも軽動詞としてよく用いられる。(9)の例以外で、軽動詞doの目的語としてよく用いられる名詞としては(10)のようなものがある。

(10) a dance a left/right turn a dive a report a translation a drawing a sketch some work
(Quirk et al. 1985: 751)

以上のような明確に行為内容を表す動名詞あるいは名詞を目的語（あるいはランドマーク）として取る場合には、doはexecuteあるいはcarry outという非常にスキーマ的な意味であり、どのような行為をするかは、その目的語によって指定される。なお、Hoche (2009: 250)によれば、doを用いた軽動詞構文(e.g. They did a slow dance.)と、通常の動詞を用いた構文(e.g. They danced slowly)の意味の違いは主にアスペクトの違いであり、前者が時間的に区切られた (temporally bounded) 行為を表すのに対して、後者はそのような時間的な区切りのない (temporally unbounded) 行為を表す。Langackerの用語では前者は始まりと終わりが意識される完了的(perfective)な解釈、後者は非完了的(imperfective)な解釈ということになる(Langacker 2008: 147)。このような違いは、表現を構成する概念の際立ちの度合いに起因すると考えられる。例えば、did a danceとdanceではどちらも同じ概念から構成されていると考えられるが、

前者の軽動詞構文ではdoによって表される概念が際立っている。3.1で述べたようにdoにはその主要な意味として完了の аспек트가含まれる。軽動詞構文ではこの完了の意味が際立って喚起されるため、上記のような構文の意味の違いが生ずると考えられる。

さて他動詞用法では、行為を表す名詞や動名詞以外の名詞が目的語になる場合がある。英英辞典から取った(11)の例文を見てみよう。(カッコ内のパラフレイズは筆者によるものであるが、LDOCEとOALDの記述を参考にした。)

- | | |
|----------------------------------------------------------------------------|------------------|
| (11) a. It's your turn to do (= wash) the dishes. | (LDOCE) |
| b. She did (= spent) a year backpacking around the world. | (<i>ibid.</i>) |
| c. I did (= studied) French for five years. | (<i>ibid.</i>) |
| d. I was thinking of doing (= cooking) a casserole tonight. | (<i>ibid.</i>) |
| e. We did (= travel) 300 kilometers on the first day. | (<i>ibid.</i>) |
| f. The car can do (= reach) 120 mph. | (<i>ibid.</i>) |
| g. We don't do (= provide) food after two o'clock. | (<i>ibid.</i>) |
| h. We did (= perform) 'Guys and Dolls' last year. | (<i>ibid.</i>) |
| i. How are you going to do (= paint or decorate) your living room? | (<i>ibid.</i>) |
| j. He does a brilliant George Bush. (= He copies George Bush brilliantly.) | (<i>ibid.</i>) |
| k. Let's do (= have) lunch next week. | (<i>ibid.</i>) |
| l. Let's do (= visit) the Eiffel Tower today. | (<i>ibid.</i>) |
| m. They did (= punished) him for tax evasion. | (OALD) |
| n. The gang did (= stole something from) a warehouse and a supermarket. | (<i>ibid.</i>) |
| o. He doesn't smoke, drink or do (= take) drugs. | (<i>ibid.</i>) |

(9)のような軽動詞用法の場合、Langacker (2005)やHöche (2009)の分析の通り、doの目的語は事象(行為)から概念的具象化によって派生した抽象的なモノを表し、両者が概念統合(conceptual integration)して合成構造(composite structure)となる際にその目的語(動詞派生名詞)の概念内容によってdoの概念内容が精緻化(elaborate)あるいは事例化(instantiate)されていると考えられる。しかし(11)におけるdoの場合、その目的語は軽動詞用法の場合のような、明確に行為の内容を表す名詞ではなく、行為の対象を表している。このような場合には、どのようにして、表現全体の意味が得られるのであろうか。例えば、do the dishesからwash the dishes、did Frenchからstudied Frenchに相当する意味がどのようにして得られると考えるのが妥当であろうか。

LDOCEやOALDでは、これらのdoの意味はすべて別々の語義として記述されているが、本稿は可能な限り「意味と形式の一対一対応の原則」に従ってdoの意味を分析する。これはBolinger (1977)が提唱した仮説であることから「ボリンジャーの原則」とも呼ばれ、「形式が異なれば意味が異なる。形式が同じならば意味は同じである」という原則である。

瀬戸ほか(編) (2007: 279)は基本的にこの原則に従って(11)のdoの意味を説明している。そしてこの種のdoは「行為・作業の対象を目的語とし、行為者と行為の対象との相互作用により「する」の具体的な意味内容が決まる」「また、do Beethoven's fifthは、ベートーベンの第5を「演奏する」も「指揮する」も意味する。つまり、doの対象が行為者とどのような関係を結ぶかによって、対象となるものの存在価値[意義]のある面が抽出されてdoの意味内容が決まる」と述べている。この説明の注目すべき点は、doの意味解釈に関して、目的語だけでなく行為者を表す主語も関与していることを指摘している点である。しかし、「対象とな

るものの存在価値[意義]のある面」とは正確にはどのような面なのか、それがdoの意味内容にどう影響するのかは明らかではない。以下でこの点について検討する。

(11)のdoは、動名詞や行為を表す名詞を目的語とするdoと同じように、doの意味自体は「する」(carry out, execute)であり、Langacker (2005: 135)が指摘するように「行為に対する主語(トラジェクター)の意志的な制御の行使」という意味が含まれると考えられる。そしてdoと目的語の概念構造が合成され、その際に目的語の概念内容によってdoの概念内容が精緻化されることによって、do the dishesやdid Frenchからwash the dishesやstudied Frenchに相当する意味が得られるのである。では、(11)の目的語はdoの概念内容をどのように精緻化していると考えべきであろうか。

この問題を説明するには百科事典的意味観を採用する必要がある。言語知識の自律性を主張する生成文法や、ソシュールの構造主義に基づく構造意味論では、辞書的(言語的)知識と百科事典的知識は明確に区別することができると考え、特に構造意味論においては語の意味は辞書の知識、すなわちある語と別の語の意味の区別に寄与する示差的特徴によって構成されていると考えられている。例えば、motherの意味は[一世代上][女性][直系]という示差的特徴から成ると分析され、motherと他の語を区別することには必ずしも貢献しない[優しい][子どもの世話をする]というような非示差的特徴は百科事典的知識とされ、語の意味ではないと見なされる。それとは対照的に、認知言語学(そしてその一分野としての認知文法)では、辞書の知識と百科事典的知識の明確な区別は不可能であり、語の指示対象について母語話者が持っているあらゆる知識が語や表現の解釈に関わるという、百科事典的意味観を採用している³⁾。この意味観を取る理由はいくつかあるが、例えば、次のような文の意味解釈には明らかに言語外的な知識が関わっている。

(12) a. John is in the phone book.

b. The insect is in the phone book.

(松本(編) 2003: 9)

松本(編) (2003)によると、(12a)のphone bookは電話帳の内容を指し、(12b)のphone bookは物体としての電話帳を指していると解釈できるが、この解釈は、昆虫は電話を持っておらず、電話帳に昆虫の電話番号はリストされていないという知識に基づいている。したがってこの種の百科事典的知識がphone bookの意味に関わっていると考えられる(松本(編) 2003: 9)。また、motherから派生した形容詞のmotherlyには「(母のように) 優しい」という意味があり、動詞としてのmotherには「(子どもなどの) 世話をする」という意味がある。これらの例からも意味拡張において百科事典的知識が重要な役割を果たしているのは明らかであり、言語の意味から百科事典的知識を排除するのは妥当ではないと言える(松本(編) 2003: 27)。

百科事典的意味観を取るLangacker (2008)は、言語表現の意味について、概念内容(conceptual content)すなわち指示対象についての百科事典的知識と、その概念内容に対する解釈(construal)から構成されていると説明している。例えば、英語の母語話者はglassについて、その形状、機能、材質、大きさなど様々な知識を持っているのが普通である。このような百科事典的知識を背景にして、当該の指示対象は理解されている。この種の背景的知識は研究者によって様々な名称で呼ばれているが、Langackerの認知文法ではドメイン(domain)と呼ばれ、一つの指示対象に対して通常複数のドメインが存在するため、そのようなドメインの集

³⁾ 百科事典的意味観についての詳しい議論はHaiman (1980)、特に認知言語学(認知文法)におけるこの意味観についてはLangacker (1987: 154-166)、Langacker (2008: Ch.2)を参照。

まりはマトリックスと呼ばれる⁴⁾。さらに言語表現の意味を構成する概念内容には、詳述性(specificity)、焦点化(focusing)、際立ち(prominence)、パースペクティブ(perspective)といった解釈が加えられている(Langacker 2008: Ch.2)。

ここからは以上のようなLangackerによる意味の説明に基づいて、(11)のdoおよびその目的語の意味を考察する。瀬戸ほか(編)(2007: 279)が指摘するように、この目的語は行為ではなく行為の対象を指している。このような目的語の場合には、その概念内容を構成している複数のドメインのうち、その対象に対して行われる特定の行為に関するドメインが慣習的に活性化され、その知識の領域がプロファイルされると考えられる。これは、焦点化の一種としての際立ちという解釈が、概念内容に加えられているということである。例えばdo the dishesの意味を考えてみる。dishの概念内容を構成するドメインには、皿の大きさ、形、材質、用途、扱い方などについての知識が含まれると考えられる。dishがdoの目的語になった場合、これらのドメインのうち最も活性化されるのは行為に関するドメイン、つまり「扱い方」についてのドメインであると考えられる。そのドメインには、dishは「割れやすいので、落としてはいけない」「乱暴に扱ってはいけない」「使用後は水と洗剤を用いて洗う」というような、対象に対する行為についての知識が含まれると考えられるが、dishがdoの目的語になる場合、このような行為のうち、特に「使用後は水と洗剤を用いて洗う」という知識が慣習的に活性化されプロファイルされる。このような、概念内容に対する焦点化、際立ちという認知的解釈によって、doの目的語としてのdishは、結局、動名詞や動詞派生名詞のような明確に行為を表す目的語と同じように、ある種の行為を表現できるのである。

このような分析は(11)のすべての目的語に当てはまると考えられるが、対象に対する行為に関するドメインの中でどの知識の活性化が慣習化されるかということは、予測可能であろうか。例えば、目的語の指示対象に対して行われうる数々の行為の中で、慣習的に活性化されるのは対象に対して最も典型的に行われる行為だと言えるだろうか。(11)の中にはそう考えられるものもある。例えば、(11b)、(11e)、(11f)では時間、距離、速度を表す名詞が目的語になっており、それぞれのdoはspend「(その時間を) 過ごす」、travel「(その距離を) 進む」、reach「(その速度を) 出す」という意味として解釈されるが、それらの行為はその目的語が表す対象にとって、典型的な行為と言えるであろう。また、(11h)のGuys and Dollsというミュージカルに対して行われうる行為の中で典型的なのはperform「演ずる」であろうし、(11k)のlunchに対する典型的な行為はhave「食べる」であろう。しかし、French「フランス語」を対象とする行為には「話す」「書く」「聞く」「読む」「(学校などで) 学ぶ」「(母語として) 習得する」などがあるが、(11c)ではstudy「(学校などで) 学ぶ」という知識の活性化が定着している。Frenchに限らず言語に対して行われる数々の行為の中で、最も典型的であるのはおそらく「話す」であり、それが「学ぶ」であるとは言えないだろう。このように、焦点化されるのは、対象に対する典型的な行為からそうとは言えない行為まで様々であるが、どれも対象に対してきわめて積極的、能動的に働きかける行為である。これは合成されるdoの「対象に対する意志的な制御の行使」「責任」という意味との整合性を取るためであろう。結局、目的語の概念の中で活性化されるのは、その目的語が指す対象に対して日常的に行われる積極的、能動的な行為に関する知識である。そのような知識によって(11)のdoは精緻化されているという点でこれらのdoの意味には動機づけがあるが、それが特定のどの行為であるのか

⁴⁾ この種の百科事典的知識はFillmore (1977)では「フレーム」、Lakoff (1987)では「理想化認知モデル」(Idealized Cognitive Model)と呼ばれているが、これらはほぼ類似した知識構造を指す。

ということは完全に予測することはできない⁵⁾。

行為の対象を目的語とするdoの意味の中にも、(11)のような辞書に登録され慣習化した意味もあれば、それほど慣習化していない意味もある。後者の場合に活性化されるのは、それほど典型的でない行為に関する知識である場合もある。その際、目的語のドメイン内のどのような知識が活性化され、どのような意味に拡張するかは、主語が何であるかによる。なぜならば同じ対象でも、それに対して積極的、能動的に行われる行為がどのようなものであるかは主語によって異なるからである。例えば、すでに上でも触れたが、瀬戸ほか（編）(2007: 279)が指摘するように、do Beethoven's fifthの主語が何であるかによって、doはperform「演奏する」の意味にもなるしconduct「指揮する」の意味にもなる。

以上のように、本動詞doの他動詞用法はexecuteあるいはcarry outという抽象的な意味を持っており、(7)のような行為の内容が明確でない場合を除いて、doと目的語の概念が合成される際に、その目的語の概念によってdoの概念は精緻化され、具体的にどのような行為が行われるのかが指定される。それは目的語が動名詞や明確に行為を表す名詞の場合（軽動詞用法の場合）ばかりでなく、(11)のような行為の対象を目的語とする場合でも、その対象のドメイン内の行為に関する知識の活性化により、同じような精緻化がなされる。

3. 1. 2 自動詞用法

doには(13)のような自動詞用法がある。

(13) a. They are free to do as they please.

b. He's doing very well at school.

(OALD)

c. These clothes just won't do.

(Langacker 2005: 135)

自動詞用法のdoも基本的な概念内容は他動詞用法のdoと同じであるが、その概念内容に対する解釈が異なると考えられる。どちらの用法のdoも「行為」に関するドメインを喚起し、そのドメインがdoの理解の背景的知識（ベース）となっているが、その知識の中で言語表現の意味の理解のために最も関与する部分（直接スコープ）には、行為の内容(executeあるいはcarry out)だけでなく、行為者、行為の対象といった行為の参与者についてのスキーマ的な知識が含まれると考えられる。(13c)の場合は、主語が表す無生物を生物に見立てて理解するメタファーが関わっていると解釈できる。(14)が示すように、このような概念内容のうち行為の対象は（つまり何を読み、何を踊るのかは）、他動詞用法でもプロファイルされない場合がある。

(14) a. You've got to do the reading.

(瀬戸ほか（編）2007: 279)

b. I did a dance.

(Langacker 2005: 178)

しかし他動詞用法では、行為の内容は、目的語として表現されるランドマークとしてプロファイルされており、doの概念内容は目的語（と場合によってはそれに加えてトラジェクターとしての主語）の概念内容によって精緻化されている。しかし自動詞用法の場合は目的語すなわちランドマークがないため、具体的な行為の内容は背景化されており、トラジェクター

⁵⁾ 認知言語学（認知文法）では、言語の構造は動機づけられてはいるが、完全に予測可能ではないと考えられている。このような考え方については、例えばLangacker (2008: 88)を参照。

としての主語によってある程度は精緻化されるとはいえ、精緻化の度合いは他動詞用法に比べてかなり低いと言える。

3. 2 助動詞用法

最後にdoの助動詞用法の意味について検討する。(15)が示すようにdoの助動詞用法には大きく分けて、(15a-c)疑問・否定を表す用法（付加疑問を含む）、(15d)強調用法、(15e)代動詞用法がある。

- (15) a. Do you like bananas?
 b. I don't feel like going out tonight.
 c. You know Tony, don't you?
 d. You do look nice in that hat.
 e. "Will Kay come?" "She may do." (LDOCE)

これらの助動詞用法では、本動詞用法と比べて意味の希薄化がさらに進んでいる。すなわち、本動詞用法が持つexecuteあるいはcarry outという意味内容は消え、また「行為者の行為に対する意志的な制御の行使」という意味特徴も消え、「完了」アスペクトも消失しており、時間軸上に展開する「プロセス」という、非常に意味内容が希薄でスキーマ的な意味を持つ。ただし、(15e)の代動詞用法の場合は、多少本動詞の意味が残っていると言えかもしれない。次の文を見てみよう。

- (16) *Janet likes soccer, and Mike does so, too. (Höche 2009: 249)

(16)のdoesはlikesの代動詞として機能している。Höche(2009:249)によると、代動詞用法のdoには本動詞と同じように「行為」(activity)という意味特徴が含まれているにもかかわらず、(16)ではlikeという「行為」の特徴を含まない動詞の代用形となっているので、容認可能性が低いとのことである。しかし、複数の英英辞典には次のような用例もある。

- (17) a. So now you know as much as I do. (LDOCE)
 b. 'I love peaches.' 'So do I.' (OALD)

(17)のようなdoが前方照応的に状態動詞を指す用例も多く見られることから、代動詞用法のdoも、本動詞の意味の希薄化がかなりの程度進んでいると言えるだろう。Langacker (2005: 180)は、助動詞のdoは非常にスキーマ的なプロセスを表すので、それと合成される動詞の意味と完全に重なり合い、その意味が認識されにくいと述べている。これら助動詞doの意味は、それと合成される動詞の意味によって精緻化されと考えられるが、代動詞用法にはこのことが明確に当てはまる。なぜならば、代動詞のdoはそれが前方照応的に指示する動詞と全く同じ内容を表すと解釈されるからである。では、助動詞doの疑問、否定、付加疑問および強調という意味はどのようにして得られるのだろうか。これらの意味は、doの意味がそれと組み合わせられる動詞によって精緻化されることだけでは得られない意味である。これらの意味は、成分構造の意味を足し合わせても出てこないのも、助動詞doが用いられる構文スキーマ(constructional schema)の意味から得られると考えざるを得ない。構文スキーマとは成分構造（構成要素）を合成構造（表現）へと合成する際のパターンのことである。認知文

法では、文法は慣習として定着した合成パターンつまり構文スキーマから構成されていると考えられており、この構文スキーマ自体も意味構造と音韻構造から成る記号構造である (Langacker 2008: 167-168)。助動詞doが生起する構文スキーマには概略(18)のようなものがあると考えられる。

- (18) a. [Do + 名詞句 + 動詞句]
 b. [WH句 + do + 名詞句 + 動詞句]
 c. [名詞句 + don't + 動詞句]
 d. [名詞句 + 動詞句 + don't + 代名詞] or [名詞句 + don't + 動詞句 + do + 代名詞]
 e. [名詞句 + do + 動詞句]

そして、(18a)の構文スキーマが表現に課す構文的意味は「yes/no 疑問」、(18b)の場合は「WH 疑問」、(18c)は「否定」、(18d)は「付加疑問」、(18e)は「強調」である。助動詞のdoの場合、その意味は非常にスキーマ的で希薄なので、代動詞用法の場合を除き、このような構文的意味が表現全体の意味に対して重要な役割を果たしていると考えられる。

4. 結論

本稿は、先行研究を踏まえ、認知文法の理論的枠組みを用いて、doの多義性を詳細に分析した。Langacker (2002, 2005)が指摘するように、他動詞用法の場合、doはexecuteあるいはcarry outを意味し、そこには「行為に対する意志的な制御の行使、責任、完了」という意味も含まれる。do自体はかなりスキーマ的で抽象的な意味であるため、実際にどのような行為が行われるかは、その目的語によって示される。つまりdoの概念とその目的語の概念が合成されることにより、前者が後者によって精緻化される。このようなLangackerの指摘を踏まえ、本稿は、目的語が行為の内容そのものではなく行為の対象を表す場合には、目的語の概念内容（ドメイン）のうち、その対象に対して行われる特定の行為に関する知識が活性化され、その知識によってdoの概念内容が精緻化されると分析した。その場合、主語が知識の活性化に関与することもある。

また、自動詞用法の場合は目的語がないため、他動詞用法の場合にランドマークとなる行為の内容が背景化されていると解釈できる。

Langacker (2002, 2005)は、助動詞用法のdoは本動詞用法の場合よりさらに意味が希薄化しており、「プロセス」という高度にスキーマ的な意味を持ち、その概念内容はそれが指す動詞によって精緻化されると指摘している。これは代動詞用法の場合には妥当な分析と言えるが、疑問、否定、付加疑問、強調の用法の場合は、doに組み合わせられる動詞の概念内容によってdoが精緻化されるというだけでは、それらの意味を得ることはできない。そこで本稿では、このような場合にはdoとそれに組み合わせられる動詞が生起する構文スキーマによって、表現に疑問、否定、付加疑問、強調という意味が加えられると分析した。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
 Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
 Fillmore, Charles J. (1977) Topics in lexical semantics. In: Roger W. Cole (ed.) *Current issues in linguistic theory*, 76-138. Bloomington: Indiana University Press.

- Haiman, John (1980) Dictionaries and encyclopedias. *Lingua* 50: 329-357.
- Höche, Silke (2009) *Cognate object constructions in English: A cognitive-linguistic account*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto (1949) *A modern English grammar on historical principles, Part VI, Morphology*. London and Copenhagen: George Allen & Unwin Ltd. and Ejnar Munksgaard.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the world*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar, Volume 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2002) *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. 2nd ed. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2005) Integration, grammaticization, and constructional meaning. In: Mirjam Fried and Hans C. Boas (eds.) *Grammatical constructions: Back to the roots*, 157-189. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- 松本曜 (編) (2003) 『シリーズ認知言語学入門〈第3巻〉認知意味論』東京: 大修館書店.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive grammar of the English language*. Harlow: Longman.
- 瀬戸賢一ほか (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』東京: 小学館.
- 辻幸夫 (編) (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』東京: 研究社.

辞書類

- LDOCE: *Longman dictionary of contemporary English*, 5th edition. (2009) Harlow: Pearson Education.
- OALD: *Oxford advanced learners' dictionary*, 8th edition. (2010) Oxford: Oxford University Press.